

# 比較試論 *Aen.* VIII と *Od.* III

—エウアンデルとパラス像を中心として—

根本英世

はじめに

ラテン文学におけるギリシア的要素・影響については、今更あらためて述べる必要もないほどに論じられてきた。たとえばジャンルに関しても、叙事詩、抒情詩、悲・喜劇をはじめとして、ギリシアの影響が見られぬ分野は稀である。弁論家教育の理想を述べるにあたって同時に、ローマに対する愛国心を吐露しているクウインティリアヌスにしても、“*satira quidem tota nostra est*”と言わねばならなかった<sup>1)</sup>。これが個々の作品に見られるギリシア的要素となると、枚挙にいとまもない。

しかしラテン作家の本質をギリシアの模倣のみに見出すことに終始している限り、彼らに近づく道は閉ざされることになる。古典期までに既に数百年の伝統を有していたローマにも、独自の歴史展開の中で育まれてきた固有の倫理・価値観が存在していたのだから<sup>2)</sup>、模倣を専らとした作品が、その社会に受け容れられたとは考えられないからである。ウェルギリウスを例にとれば、*Ecloga* はテオクリトスの、*Georgica* はヘシオドスの、*Aeneis* (以下 *Aen.*) はホメロスの“模倣”<sup>3)</sup>とみたところで、それはあくまで“表現形式”の問題、さらには“超えるべきものと定められた模範”の謂と解すべきであろう。実際 *Ilias* (以下 *Il.*)・*Odysseia* (以下 *Od.*) に流れる精神と *Aen.* のそれとは、異質である。ホメロス以来のギリシア文学の伝統から、*dactylic hexameter* を用いて「英雄の勲」を歌うという形式を借用したウェルギリウスが、ホメロスの詩とは全く異なった意図を持っていたのは明らかであるし、またその作品は公表前から“イリアスをしのぐもの”と期待されもした<sup>4)</sup>。

*Aen.* を詩作するウェルギリウスの念頭に絶えずホメロスがあったことは、その素材・構成・叙述等に関する研究から明らかである<sup>5)</sup>。しかし、上述のようにホメロスとは目的を異にするウェルギリウスなれば、その素材の消化、人物描写には、ギリシア文学の伝統からの独立、換言すれば“ローマ化”が、さらには“ローマ的なもの”の描出が予想される。*μεγάθυμος Ἀχιλλεύς* も *πολύμητις Ὀδύσσευς* も *pius Aeneas* も同じくトロイア伝説圏の英雄でありながら、前二者の世界と後

者のそれとは全く異なる。*Aen.*のアエネアスはホメロスに登場するその人ではなく、ローマ建国という偉業を課せられたため、ときにはその行動に明快さの欠ける、一種のあと味の悪ささえ示さねばならぬ英雄——しかしそれゆえ一層、心理の複雑な襞を読者に感じさせる人物として描かれているが、これはウェルギリウスの“創造”によるものと言えよう<sup>6)</sup>。

*Aen.*に登場する人物は数多いが、本稿ではこれまで意の払われることの少なかったエウアンデルを中心に考察してみたい。彼はいわゆる *minor characters* の一人にすぎないが、その登場シーンには、ホメロスとの比較上の興味と同時に、*Aen.* 全篇——ことに XII 巻——と深く関連する問題が含まれていると思われるからである。またその際詩人が既存の伝承をどのように物語に織り込んだのか、についても考えてみたい。

## I

*Aen.* VIII 巻（以下ローマ数字のみの場合は *Aen.* の巻数を、算用数字のみの場合は VIII の行数を示す）で、ラティウム（ラティウム）の戦況に胸を痛める（18f.）主人公の夢枕に立った河神ティベリヌスは、エウアンデルと盟約を結ぶよう、忠告する（36—65）。この言葉に従って英雄はパランテウムの地に赴き、トゥルヌスに対抗すべくエウアンデルに信義を求める（127—151）：その際彼の拠りどころは、聖なる予言、世に隠れなきエウアンデルの名声、そして互いに“祖先を共有”していることであった（132 *cognatique patres*）<sup>7)</sup>。エウアンデルはただちにアエネアスを受け入れる（154f.）。

この箇所はしばしば *Od.* III 巻に語られるテレマコスのピュロス訪問と関連づけて解釈される<sup>8)</sup>。この解釈はウェルギリウスにおけるホメロスの影響を重視したもので、或る意味では伝統的と言えよう。たとえばアエネアスを目にした折のエウアンデルの言葉が、テレマコス（テレマコス）を眼前にしたネストルの科白（*Od.* III 123f.）に由来する、と考えるのである<sup>9)</sup>。このエウアンデルの言葉はおそらくホメロスのものを踏まえたものであろう。エウアンデルはアエネアス（アエネアス）がその父アンキセス（アンキセス）に似ていると驚くが、157f. のエピソードでは彼自らが若き日のアンキセス（アンキセス）を目にしたことが語られる。すなわち、かつてラオメドン（ラオメドン）の息子たちがその妹ヘシオネ（ヘシオネ）をサラミス（サラミス）に訪れた折に<sup>10)</sup>、エウアンデルはアンキセス（アンキセス）の勇姿に心うたれ、互いに友誼を結んだ。そしてアンキセス（アンキセス）は帰り際にエウアンデル（エウアンデル）に“矢筒”、“矢”、“轡”を贈ったのである。友誼を結ぶ際の贈物というモチーフは、一見 *Il.* VI 巻の“ディオメデス（ディオメデス）とグラウコス（グラウコス）”のシーンを想起させるが、異国の地で援助を求める英雄

が受け入れられるという、より大きな枠で考えれば、詩人の念頭にあったのはやはり *Od.* III 巻と考えるべきであろう。

事実アエネアスがこの地に受け入れられる過程と *Od.* III 巻には共通点と見られるものが多い。それは以下のように整理されよう：

- (i) a) テレマコス一行がピュロスに到着した折、人々はポセイドンに犠牲を捧げている最中であつたが (*Od.* III5f.)、 b) エウアンデルたちもヘルクレスに犠牲を捧げているところである (102f.)。
- (ii) 外来の一行にまず声をかけるのはその地の王子 a) ペイストラトスであり (*Od.* III43f.)、 b) パラスである (112f.)。
- (iii) その地の王、ネストルもエウアンデルも共に老人として描かれており、
- (iv) その訪問者に対する言葉にも共通するものがあるが、
- (v) それには、兩人とも各々訪問者の父親と親しい関係にあつたことが前提とされている。

しかしこれらの点も詳細に検討すれば、VIII のシーンがホメロスの影響のみによるものではないことが明らかになる。 (i)–(v) を吟味しつつ、ウェルギリウスと既存の伝承の関係、またそれを如何にして物語に取り入れたのかをみてみよう。

## II

上の(i)の場合、ピュロス人がポセイドンに犠牲を捧げていたのは、ポセイドン＝ネレウス＝ネストルという家系以上に、メントル姿の女神アテネの祈りの言葉を引き出すためのものと理解できる<sup>11)</sup>。オデュッセウスの帰国については *Od.* 前半で繰り返し語られ、それは叙事詩の聴衆に筋の展開を知らせるという機能をもつたのであろうが、この *Od.* III でもそれ以上の意味は見出し難い。ではパランテウムにおけるヘルクレスへの犠牲は、物語の以後の構成とどのような関係をもっているのだろうか。この神のための祭儀の宴は、主人公一行の到着・受け入れによって中断されるが、エウアンデルの勧めによって英雄たちも加わり、再び続けられる (172f.)。そして王はこの祭がヘルクレスのためのものであり<sup>12)</sup>、何故この神が祭礼を受けるに至ったかを——いわゆる“カクス”エピソードを、語り始める。すなわち約90行にわたるこのエピソード導入は、“ヘルクレスの祭儀”によって準備されているのである。

ではこの“カクス”エピソードはいかなる機能をもっているのだろうか。これにはたとえば、エピソードの主人公ヘルクレスのアリスティアを通してアウグストゥス帝が讃えられているとみる解釈、あるいは、ヘルクレスにはアエネアスが、

カクスにはトゥルヌスが反映されているとする見解が、ある<sup>13)</sup>。しかし前者の解釈に従うと“カクス”の役割が明瞭に説明できぬ憾みがあるし、また物語全篇とこのエピソードとの関連も曖昧となりかねない。では後者はどうだろうか。VIIIの“ヘルクレスによるカクス退治”とXIIの“アエネアスとトゥルヌスの決闘”を、テキストに拠って比較してみよう。カクスはヘルクレスに、トゥルヌスはアエネアスに敵わぬとみて、共に退散しようとする、その姿の描写には相似たものが瞥見される<sup>14)</sup>。またそれは、彼らが相手に対して恐怖を抱いているがゆえである<sup>15)</sup>。そしてヘルクレス、アエネアスの怒りも凄まじい<sup>16)</sup>。他にもカクスとトゥルヌスの描写には共通点が見られる<sup>17)</sup>。これらの点を考慮すれば、この“カクス”エピソードはXIIと関連させて理解すべきではなかろうか。カクスの手強さが、トゥルヌスとの決闘がアエネアスにとって容易ならざるものとなることを示していると思われるのである。

このように考えれば、“ヘルクレスへの祭儀”がカクス・エピソードを通して細い糸によってXIIと結ばれていると看做すことができよう。

(iv), (v)について。主人公は王エウアンデルに対し、王がトロイアの攻めの総帥アガ멤ノン兄弟と血縁にあたることを一応認めながらも(129f.)、彼のもとに援助を求めに来たのは、祖先を共有するため、と語りかける。しかし、“血縁の誼み”というモチーフは既にVII219f.で、イリオネウスがラティヌスに盟約を求める際に用いられており、何の新しさもない。かりにエウアンデルが主人公の言葉をそのまま受け入れて、ただちに援軍を与えてしまうと、このシーンはVIIの“イリオネウス＝ラティヌス”シーンの繰り返しに近いものになるであろう。ここで詩人は、おそらくは“叙事詩の伝統”に属していたと思われる“来訪の客が、優れたその父親に似ていることに主人側が気づく”、また“祖父(あるいは父)の代の友誼とその際の贈物”という二つのモチーフを用いたものと思われる。その際前述のヘシオネに関する伝説が詩人によって巧みに利用されたことは想像に難くない。

主人公がアトラスを始祖とする遠い血縁について語っているのに、それを受ける王が漠としたその家系には一切触れていないのは、一見奇妙と考えられよう。英雄の言葉が無視さえしているようでもある。しかし王は形の上では、親しみを求めるアエネアスの言葉が無視しながらも、英雄も読者もまったく期待していなかったことがら——アンキセスとの相似、また王自身とアンキセスとの出会い・交わり、について語る。その結果、主人公は予期した以上の好意を示されることになる。表面上はギャップを感じさせる両者のこの言葉の交換には、却って意外性、劇的要素という効果が含まれているのである<sup>18)</sup>。一般に、伝統を無視した“創

造”が存在しうるのかは、甚だ疑問であるが、以上のように考えれば、詩人がここで、“叙事詩の伝統”に従いつつも、既存の伝承を用いつつ、彼一流の創造を行なって、一応の成果をあげていると見ることができよう。

ウェルギリウスが、しかし、ここでエウアンデル＝アンキセスの友誼を——おそらくは新たに——導入したのは、ただ王と主人公の出会いを劇的なものとするためだけであったのだろうか。

再びテキストに戻ると、王が英雄に援軍を約束したのは(169f.)、アンキセスとの友誼によるため(169 *ergo*)であった。しかし *ergo* の直前で、友誼を結んだ折にもらい受けた武具を現在は王の息子パラスが身につけている、と語られていることに注目したい。詩人はこの箇所では、既に一度登場している王子に読者の注意を促しているように思われるのである。

### III

ホメロスとウェルギリウスを比較する場合、アキレウスにはアエネアスが、パトロクロスにはパラスが対比される<sup>19)</sup>。しかし、*Il.* ではアキレウスとパトロクロスはトロイア攻め以前から、子供のときからの親友として描かれており<sup>20)</sup>、本来ならこの比定は不可能かと思われよう。だが詩人はまず、アエネアスとパラスの父親同志の友情という設定を通して、両人を同じ世代に属すものと描出しようとしている。

*Il.* XVI, XVII でパトロクロスはアキレウスの武具を身に纏ってヘクトルと闘うが、敗れ、トロイアの英雄はその武具を奪い去る。しかしこのトロイア人もアキレウスに打たれ、身につけていたその武具を元の持主に取り返されてしまう。この親友の復讐というモチーフの中の“武具をめぐる争い”という一筋の糸を看過することはできない<sup>21)</sup>。

さて、*Aen.* でもパラスを殲したトゥルヌスは、アエネアスの手にかかって斃れる。一騎打ちの最後で、前者が和解の申し出とも、命乞いともとれる言葉を口にすると、英雄は降しかけた手を一瞬止める<sup>22)</sup>。しかし主人公にトゥルヌス殺戮を決意させたのは、この仇敵の肩に懸かるパラスの“剣帯”であった。物語のクライマックスをなすこのシーンにも、“武具の絡んだ復讐”が見られるのである。但し *Il.* の決闘シーンではアキレウスがヘクトルの身体を被う鎧の間隙を狙って槍を投げた時点で、この復讐は既に完遂されることが予想されるし、またそれに続くアキレウスの科白で決定的なものとなる。これに較べると *Aen.* の場合は間際まで“剣帯”への言及がないため、ペリペテイア的要素は強いものとなっている。

パラスが112f.で、パランテウムのものとしては最初に、アエネアス一行に言葉をかけるのは、先にみたように *Od.* III のペイシストラトスを想わせる。しかし *Od.* の場合は平和なピュロスの、のどかな祭儀にふさわしい歓待の言葉であったが、*Aen.* では事情は異なる。既に“イリアス的”色調を帯びている VIII の、ラティウムの緊張が、パラスの尋問には窺われよう。これは同時に“戦士”パラスを導入するシーンでもある<sup>23)</sup>。またエウアンデルが息子をアエネアスに託すシーン(514f.)も、テレマコスのピュロス出発(*Od.* III475f.)を連想させる。しかし *Od.* のシーンが典型的であるのに対して、ここには王子を主人公の麾下に属させるといふ王の決断が明瞭に表わされている<sup>24)</sup>。またここでは公子の活躍も暗示されている(515f.)。ペイシストラトスが *Od.* で演じる役割はさして重要なものではないが、パラスが物語の展開の上でもつ意味は大きい。

出陣の折の彼は、女神ウェヌスがとりわけ愛でる“暁の星”Luciferに喩えられているが(589f.)、これはただ彼のきらびやかな勇姿が軍勢の中で際立っているのを示すだけではなく、女神の加護をも示唆しているものと見られる。“他の星々にもまして”(590)とは、女神がパラスに対して、その幕下のどの戦士よりも、好意を示しているものと考えべきであろう。のちの彼のアリスティア(X379—436)が予想されるのである。“暁の星”は、この箇所以外ではIIで現われるだけであるが、そこでもトロイア落ちのアエネアス一行がイダ山に逃れるのを見守っていることを斟酌すれば、上の解釈は首肯されよう<sup>25)</sup>。このパラスも結局はトゥルヌスに打ちとられるが、しかし彼の死後アエネアスのトゥルヌスに対する行動の直接的動機のひとつは、パラスの仇討であったことを忘れてはならない<sup>26)</sup>。本来は“ローマ建国”のためのトゥルヌスとの決闘が、パラスによってモチーフの二重化がおこなわれているのである。そして今、このパラスをエウアンデルが、主人公の要請によって戦地に赴かせたのは、自分とアンキセスとの友誼——その記念の品は武具であった——ゆえであったことを、再び銘記しておきたい。

*Aen.* に登場する人物像は、その多くがギリシアの伝説に由来するか、或はローマの伝承に基いている。では“パラス”はどうであろうか。古典資料には多くの“Pallas”が見られるが、*Aen.* に関係すると思われるものは少ない<sup>27)</sup>。しかしこれらの資料および引用された伝承から得られるパラス像は、“父エウアンデルがアルカディアからイタリアへと移住してきて、息子を埋葬した丘がその名にちなんでPallatiumと名付けられた”或は“父の死後パラスは暴動の際に落命した”という、模糊たるものにすぎない<sup>28)</sup>。すなわちパラスは、父のアルカディアからの移住との関連から、ローマではある程度古くから信仰を受けていたものと推測されるものの、その明確な像はウェルギリウス以前にはおそらく確立していなかつ

たと思われる。

“Pallas”の語源解釈についてはさまざまな試みがなされてきたが、未だ定説とされるべきものはない。今敢えて、そのうちの一つ、“若者”と関連づける説を採れば<sup>29)</sup>、詩人はパラスのうちに“若さ”の象徴を託そうとしたのかも知れない。事実、パラスの死以外にも、ニースス＝エウリュアルスの死 (IX431f., cf. 437f.)、ラウススの死 (X815f., cf. 821f., 843f.) を描写する際の詩人には格別の思い入れ——同情、憐憫を上回る感情が窺われるのである。これは伝えられる詩人の性癖<sup>30)</sup>と結びつけて解釈することも可能ではあろうが、むしろ戦場で失なわれゆく盛りの若さに対する詩人の衷心からの、哀惜の情と、鎮魂の意との、発露であると考えたい<sup>31)</sup>。

ウェルギリウス以前のパラスは、現存資料に拠る限り明確な像をもっていなかったが、上に見てきた通り、詩人によって物語展開の上で重要な機能を与えられ、読者の前にその姿を明瞭に現わすことになった。さらに、詩人が51f. でパランテウムの名の由来を語るのを勘案するとき、我々はここに伝統的素材に息吹きを与え、再生以上の成果——これはすでに“創造”と称しうるであろう——を達成している詩人の技量を看過するわけにはいかない。そしてパラスの“若さ”が、読者に一層強い印象を与えるのは、その老父エウアンデルとの対照を通してのことである。

#### IV

ここでII章(iii)で言及したネストル＝エウアンデルについて考えてみたい。テレマコスが故国イタケをあとにしてピュロスへ向ったのは、異邦人姿のアテネの忠告に従ったためであったが(*Od.* I279f.)、それはネストルから、さらにはスパルタのメネラオスのもとで、父の風声を求めるためである。一方アエネアスも河神ティベリヌスの言葉に従い、援軍を求めてパランテウムに向う。前者の場合は、父の不在に乗じて館で無法を振舞う母の求婚者たちに対抗するための、また後者の場合は戦局を打開するための、手段を求める使命を帯びている。また後者は目的地で援軍を得ることができたし、前者は父の消息を尋ねるにはメネラオスの許に赴くよう忠告を受け、激励される(*Od.* III316f., 375f.)。外来者である主人公(あるいはその息子)に親切を尽し、迎え入れ、さらにその好意が以後の彼らの行動に大きな影響を与えるという点では、ネストルとエウアンデルの機能には共通するものがある。これは“老人”として語られている両者にはふさわしい役割でもあるであろう<sup>32)</sup>。

しかしこの二つのシーンを描出する際、ホメロスとウェルギリウスは明らかに差異を示している。テレマコスが父の消息を尋ねたのに対し、ネストルが一見無雑作に答える内容は以下のように整理される。

A トロイアでのギリシア軍 (*Od.* III103—200)

- 英雄たちの戦い
- アガ멤ノン＝メネラオスの争い
- ギリシア軍の船出
- 英雄たちの帰国——アイギストスの運命とオレステス

(テレマコス失意をかこつ)

B テレマコスを励ます (*Od.* III211—224)

(アイギストスについてテレマコス問う)

C アイギストスの受難、オレステスによる復讐、テレマコスを励ます、ラケダイモン行の勧め (*Od.* III254—328)

すなわちネストルの語り、答えは、“オレステスによる父の仇討ち”をめぐる求心的なものとなっている。しかしこれでは“オデュッセウスの消息”に関する問いは無視されているとの批判も出かねない。しかし *Od.* I 巻の神々の会議以来のシーンを考慮すれば<sup>39)</sup>、テレマコスの旅は彼を鼓舞させるのが目的であることがわかるし、ネストルが彼にスパルタ行を勧めるのも物語当初で定められていることである。として上のAに先行するテレマコスの問いと、Cのあとに続くスパルタ行の勧めの対応に気づくとき、このシーンが、オレステス物語とテレマコス激励の繰り返しを核とする、一種のリングコンポジションから成っていると見ることができよう。既に語られたことを、繰り返し聴衆に印象づけてゆくこの方法は、口承叙事詩に特有なものである。

一方ティベリヌスの忠告に従ってエウアンデルのもとを訪れたアエネアスには、——そして読者にも——予期しなかったことが頻々と続く。到着直後のパラスによる誰何に始まり、援軍嘆願に続いて父アンキセスとエウアンデルとの意外な誼みが明らかにされ、さらに型通りの饗応の宴ののちには“カクス”について語られ、“カルメンティスの門”をはじめとするエウアンデルによる案内——これらは各々物語の展開に絡んでいるか、“予言”となっている——と、シーンはめまぐるしく変化してゆく。この緊迫感に溢れたスピードは、平和なピュロスの王宮とは無縁なもので、戦雲漲る *Aen.* VII 巻以後の状況にこそ適ったものといえよう。いわゆる“低徊”の要素を極度に省いた、読まれるための作品がもつ構成がここには見られるのである。

その結果ここに見られるネストル像とエウアンデル像も当然異なる。訪問客の

父と主人側が知己であるというモチーフも、*Aen.*では劇的要素をもっていたのに対し、*Od.*では確認を補助する程度の意味しかない。エウアンデルによるアエネアス再認は“援軍派遣”という以後の物語の発端ともなっているが、ネストルの場合は再認と呼べるほどのものではなく、それも昔日懐古談で僅かに言及されるにすぎず、また物語の発展そのものと関係するところはほとんどない。そして両者の著しい相違が見られるのは、この“過去への言及”においてである。ネストルがトロイア戦争について語る時、それはテレマコスの知りたいオデュッセウスの消息をはるかに越えた、老人の旧日譚としての色彩が強いものになっている——*Il.*でもやはりその傾向を示している<sup>34)</sup>。これは、人の世を三代にわたって生き抜いて、治めてきたネストルにこそふさわしい“語り”ではあるが、そこに(ことに*Il.*)見られるのは、過去の自己に対する自負であり、失なわれた若さへの限りない憧憬であり、現実に対する忿懣と失望にほかならない。ヘシオドスの五時代説話にも見られる、ギリシア文化を特徴づける *retrospective* な態度に通じるものと言えよう。

しかしエウアンデルが過去を語る場合には、上のことはあてはまらない。息子パラスを戦地に送り出す際、彼は、過ぎし年月をユピテルが取り戻してくれるなら、と嘆じる(560ff.)。しかし、そのあとで語られる“過ぎし日の勲”は、単に昔を懐しむためのものではなく、往時の若さと力が失なわれてしまったことに対する遺憾の念、口惜しさを強調するためのものであると思われる——このことは568f.の彼の科白“されば汝の甘き抱擁から我身をふりほどくこともあるまいに、息子よ”との関係から理解される。昔日の自分であるならば、パラスを連れて出陣できようものを、と嘆いているのである<sup>35)</sup>。ここには息子の身を気づかう父性愛が美しく描かれていると言えよう。ネストルの“若き日への想い”はそれ自体で普遍性をもつが、エウアンデルの場合には、さらに“父子の別れ”という個別の出来事——しかしこれもあらゆる時代に通じるものである——を通して描かれているため、読者にはより大きな感銘と共感を与えるものとなっている。このように見れば、エウアンデルの直接の原型としてネストルを想定することが無理であることが理解されよう<sup>36)</sup>。

“息子への愛”という関連からは、IX巻のエウリュアルスの母が比較されよう(IX481—497)。息子の戦死に気づいた母は砦から飛び出し、我が子の首が敵の槍にかかっているのを目にするが、その嘆哭は凄まじいまでに狂おしい。その悲しみの耐え難さゆえに、ユピテルが我身を電撃で殺されるよう、とまで嘆願する母である(IX495f.)。しかしエウアンデルは(XI152—181)、息子同様自分も死んでしまった方がよかったと嘆きはするものの(XI161f.)、すぐに自己を取り戻し、息

子の死が誉れあるものであったことを喜び(XI166f.)、悲しみのみに沈むことを反省さえする——そしてこの態度が、アエネアスによる仇討ちへの期待に繋がる(XI176)。すなわち彼のこの言葉は XII 巻のアエネアス＝トゥルヌス決闘シーンを準備するものと考えられる<sup>37)</sup>。詩人は息子の死を嘆く親を描くにあたって、父親と母親のコントラストを示しつつ、前者エウアンデルの自制的人柄と全篇のプロットとを巧みに関わらせているのである。

## V

さてウェルギリウス以前のエウアンデル像はどのようなものであったのだろうか。ほぼ確実にこの詩人以前のものとする資料は、極めて僅かしか残存しない。それによれば、彼はアルカディア人たちとイタリアへ移住して<sup>38)</sup>、居をパランティオンに定めたが<sup>39)</sup>、その地は以前は *Valentia* と呼ばれていた<sup>40)</sup>——また入植のおりアイオリス方言をもたらし、さらに文字を初めてイタリアへ紹介したとも伝えられる<sup>41)</sup>。この地で彼はパンへの犠牲祭をおこなったが<sup>42)</sup>、これはファウヌスを最初に神として崇めたのが彼であると伝えられること<sup>43)</sup>に関連しよう。そしてアルカディアの人〔あるいはアルゴスの若者とも〕カティルスがエウアンデルの艦隊の司令官を務めたと伝えられるところから<sup>44)</sup>、彼はこの地で或る程度の勢力を誇っていたとも推定される。また詩人と時代を前後する資料から窺われるエウアンデル像も、以上の枠を大きく出ることはない<sup>45)</sup>。たとえば、トロイアの英雄アエネアスとの関係も、また彼をラティウムに援軍をもって迎え入れたのかも、詳らかではない。このことは必ずしも、エウアンデルとアエネアスの同盟に関する伝承が当時存在しなかったことに、ただちには結びつかないが、その可能性が稀薄であることも否めまい<sup>46)</sup>。

ところでエウアンデルがアエネアスにローマの古蹟を示し、その縁起を語り始めるとき、詩人は彼を“*conditor*”と呼んでいる(313)。*Aen.* 全篇を通してこの語が現われるのは、この箇所のみであることは、注目に値しよう。またその動詞形 *condo* は、“都市、民族を創始する”という意味では、*Aen.* で12回使用されている。しかしディオメデスの一例を除いて、これらはすべて“ローマ建国”との関連で用いられており、アエネアス(およびその郎党たるトロイア人)、サトゥルヌス、ロムルス、アウグストゥスの行為を表わしている<sup>47)</sup>。叙事詩 *Aen.* が新生ローマの父アウグストゥス帝に捧げられ、帝を讃えるためのものであったことは既に多くの者の指摘するところである。またロムルス、サトゥルヌス、アエネアスによるローマ建国譚が詩人の時代を溯ることは確実である。これらを考慮して、

さらに前述のエウアンデルに関する伝承に鑑みれば、ウェルギリウスはここで彼をローマ建国者たちの列座に加えようと試みているものと思われる。この“*conditor*”という語が、パランテウムの故事来歴を語る彼に冠されているのは、偶然とは考えられない<sup>48)</sup>。

*Aen.* 後半のテーマは、英雄がいかにしてローマ建国の緒に就くか、である。その際、この異邦人には当然ながらさまざまな障害が予想される。その最大のものはトゥルヌスに代表される土着人の抵抗である。外来者である彼には友軍と称しうるものもなく、四面楚歌の窮境にある。しかしローマ建国の使命を帯びた彼はこの難局を打破しなければならない。詩人はその対処策のひとつとして、土着の女王ラウィニアを英雄に妻わせるという定めを採り入れ<sup>49)</sup>——それゆえ土着人の反抗はますます募るが、同時に英雄の戦いの正当性も強化される——、またさらに、同じく移住者ではあるが既にこの地で着実に地歩を占めつつあったエウアンデルとの同盟をモチーフとしたものと思われる。そしてローマの“*conditor*”たるエウアンデルがアエネアスに援軍を約束したときに、この英雄の築く第二のトロイアも正統性を認められることになるのである。

以上の考察から、詩人が既存の伝承素材を用いて、巧みに織りあげたのが、*Aen.*のエウアンデル像であるとみることができよう<sup>50)</sup>。

## む す び

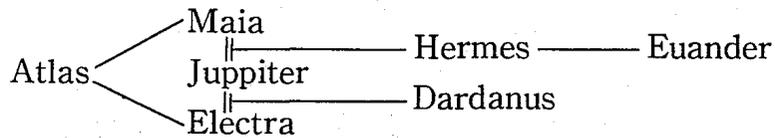
VIIIのエウアンデル・シーンには *Od.* IIIの影響が確かに認められる。しかし、たとえばこの二つのシーンに“*theoxenia*”というモチーフを見ても、それはホメロスとウェルギリウスとの形式上の類似の指摘にとどまり、VIIIの意味を説明したことにはならない。このモチーフが、ことにヘレニズム期以降好まれたことは事実であっても、ウェルギリウスはそれを物語に漫然と組み込むことはなかった。詩人には、モチーフと筋の展開との密接な関係づけが要求されているからである。同じことが、人物像を取り入れる際にも言える。但し、ここでも、既存の伝承との調和が、さらにその自然な発展が、求められる。詩人はこの課題を、エウアンデルとその息子パラスを導入することによって、物語により大きなふくらみをもたせ、またその緊密化をはかりつつ、みごとに解決しているものと思われる。

## 注

- 1) *Institutio Oratoria* X1.93 この句は字義通りには「少なくともサティラは完全に我々の（創造にかかる）ものである」と解せるが (e.g. Frieze, *10th and 12th*

*Books of the Institution of Quintilian*, 1881, New York), これを前後のコンテクストから “We are supreme in satire” (e.g. *Oxford Classical Dictionary*, 1970<sup>2</sup>, Oxford cf. Green, *Essay in Antiquity*, 1960, London, 147f.) としたところで、ローマの文学ジャンルについて語るクウインティリアヌスはやはりギリシアのそれを意識せざるをえなかった。cf. Scholes & Kellogg, *The Nature of Narrative*, 1968, Oxford, Chapt.3 この論争については cf. Cousin, *Quintilien, Institution Oratoire*, Tome VI (Livres X et XI), 1979, Paris, 29f.

- 2) たとえば“徳、卓越性”を表わす言葉ひとつをみても、ἀρετήは通常 virtus に比定されるものの、その原義（語源的には確定されていないが、Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Bd. I, 1973, Heidelberg は ἀρείων よりも ἀρέσκω をとる）および用例（既に *Od.* でも、e.g. XIX124f., XXIII314f.）からして、女性にも普通に用いられたことがわかる。cf. Adkins, *Merit and Responsibility*, 1960, Oxford (= rep. 1975, Chicago) 36f. しかし virtus はその語形成（< vir）からも、用例（e.g. Cic. *Tusc.* II 18.43）からも、すぐれて男性的な概念と言える。cf. Ferguson, *Moral Values in the Ancient World*, 1958, London 159ff., Ernout et Meillet, *Dictionnaire etymologique de la langue latine*, 1959<sup>4</sup>, Paris.
- 3) e.g. Page, *Virgil; Aeneid I-VI*, 1894, (= rep. 1967), London, ix f.
- 4) “Nescio quid maius nascitur Iliade,” Propertius, III.34 (B), 66.
- 5) e.g. Knauer, *Die Aeneis und Homer*, Hypomnemata 7, 1979<sup>2</sup>, Göttingen, Schlunk, *The Homeric Scholia and the Aeneid*, 1974, Ann Arbor.
- 6) ホメロスの英雄たちと較べるとアエネアスがあまりに強く「運命」に束縛されているとは夙に指摘されているところである。しかしそのために、彼を“マリオネットのよう”とか、“ウエルギリウス自身が行動的男性を理解できる人ではなかった”（Rose, *A Handbook of Latin Literature*, 1967<sup>3</sup>, London, 249）とするのは少々“近代的”に過ぎる——cf. Camps, *An Introduction to Virgil's Aeneid*, 1969, Oxford, 23. *Aen.* はつまるところ、アエネアスを主人公としてその武による“ローマ建国”をテーマとして（*Aen.* I 1 Arma virumque cano）、建国の“定め”（*Aen.* I 206f. et passim）に対する、やはり“定め”が許せばカルタゴを諸部族の国としたい（*Aen.* I 17f. …/…fata…）とするユノ（Austin, は “Her [= Juno's] struggle against Fate is a basic motif of the Aeneid” とみる, *Aeneidos Liber Primus*, 1971, Oxford, 36）をはじめとするものたちとの葛藤を歌っていることを、絶えず念頭に置きたい。
- 7) 134f. に述べられる両者の系譜は以下のようなになる：



- 8) e.g. Knauer, *op. cit.* 249ff., Klingner, *Virgil*, 1967, Zürich, 529f.
- 9) VIII 155f. ut verba parentis/et vocem Anchisae magni vultumque recordor  
*Od.* III 123f. *σέβας μ' ἔχει εἰσορόωντα./ἦ τοι γὰρ μῦθοί γε ἐοικότες, οὐδέ  
 κε φαίης/ἄνδρα νεώτερον ᾧδε ἐοικότα μυθήσασθαι.*
- 10) ヘシオネとサラミス島との関係は、彼女がテラモンの妻になったことによるものと推定される。cf. Apollod. *Bib.* II vi 3, III xii7. 当時この伝承はウェルギリウスの読者にも知られていたものと思われる (Servius ad *Aen.* VIII 157 はこのヘシオネ伝説について *quis enim nescit?* と)。
- 11) *Od.* III 55f., 62f. cf. Müller, *Athene als göttliche Helferin in der Odyssee*, 1966, Heidelberg, 54.
- 12) ここでは直ちにヘルクレスの名は語られない。しかし 186/7 *tanti numinis ... deorum* というペアは、既に103に見える *Amphitryoniadae magno divisque* に対応するので、読者には了解されよう。
- 13) 前者にはたとえば Schnepf, *Das Herculesabenteuer in Vergils Aeneis* (VIII 184f.), *Gymnasium* 66 (1959), またこの論文を評して Pöschl, *Forschungsbericht-Virgil*, *Anz. f. Alt.*, 1959, Innsbruck, 214 は “Dass Augustus seine ‘Vergöttlichung’ durchaus gefördert hat ..., davon bin ich auch überzeugt” と。cf. Ders, *Die Dichtkunst Virgils*, 1964<sup>2</sup>, Wien, 290. 後者の見解をとるものは、寡聞ながら Buchheit, *Vergil über die Sendung Roms*, *Gymnasium-Beiheft* 3, 1963, Heidelberg, 116f. のみ。なお Buchheit, *op. cit.* 117n., 483 は “ギリシア最大の英雄とローマの英雄とを対照させている” とみる Liebing, *Die Aeneasgestalt bei Vergil*, Diss-Kiel, 1953 の説を紹介。
- 14) VIII 223f. ... fugit ilicet ocior Euro/speluncamque petit XII 733 fugit ocior Euro 913 quacumque viam ... petivit cf. Schlunk, *op. cit.* 99f.
- 15) VIII 222f. tum primum nostri Cacum videre timentem/turbatumque oculis XII 916 cunctaturque metu letumque instare tremescit cf. 894f. non me (= Turn.) tua fervida terrent/dicta cf. XII 875.
- 16) VIII 219f. Alcidae furiis exarserat atro/felle dolor 230f. ter totum fervidus ira/lustrat Aventini montem XII 945f. ille (= Aen.) .../... furiis accensus et ira 950f. hoc dicens .../...fervidus
- 17) Buchheit, *op. cit.* 126f.

- 18) ティベリヌスの予言 (35—65) では、パランテウムのエウアンデルに盟約を求めに行くよう、また神自身もそれを助けよう (51f.)、と語られるだけで、エウアンデル=アンキセスの友誼については一切触れられていない。なお河神の予言に現われる“数”の意味については、cf. Gransden, *Aeneid VIII*, 1976, Cambridge, 188ff.
- 19) Camps, *op. cit.* 23.
- 20) e.g. *Il.* XXIII 85f.
- 21) *Il.* XXII 321f., 331f., 367f., 376, 399.
- 22) XII931f. のトゥルヌスの言葉は、たとえば Page, *Aeneid, VII-XII*, 1900, London (= rep. 1964) の解するような“命乞い”ではあるまい。XI443f. および XII676f. (とくに 679 *morte pati*) のトゥルヌス自身の科白、XII865f. (Dira の予兆) を考え合わせれば、彼には覚悟ができていたと思われるからである。なおこのトゥルヌスの言葉に岡教授は“ギリシア的英雄からローマ的英雄への変容”をみるが、これは一つの解決策と云えよう、「ウェルギリウスの英雄像」、ギリシア・ローマの神と人間、1979, 東京, 363ff.
- 23) 110f. *audax* … *Pallas*/… *raptorque volat telo obuius ipse/et procul e tumulo*,
- 24) Gransden, *op. cit.*, comment. ad loc. は 515 *sub te* … *magistro* に “an expression of the old Roman educational ideas” をみる。
- 25) cf. II 801f. Servius ad loc. はラティウムの地に向っていた主人公一行にもこの星が見えていたとする Varro の伝えを記す。
- 26) X503f., 513f., 531f., XI176f., XII948f.
- 27) cf. *RE XVIII*, Roscher, *Ausführliches Lexicon d. Griechischen und Römischen Mythologie*, 1897-1902, Leipzig (= rep. 1965, Hildesheim), Bd. III 1.
- 28) cf. Servius ad *Aen.* VIII 51, Ovid. *Fasti*, I461f., Paus. VIII xlv 5, Diony. Hal. I32. 1f.
- 29) Frisk, *op. cit.* Bd. II 468, なお *RE XVIII* 237 は“星, 天体”と関連させる説 (Welcker et al.) を紹介。
- 30) Suetonius, *Vita Vergili* 9.
- 31) パラスの死がプロット上大きな意義をもつことは上に見たが、ニスス=エウリュアルス, およびラウスの場合にも, 詩人自らが一人称で彼らを永遠に称えようとしている点に注目したい (IX 446f., X 791f.). なお“ニスス=エウリュアルス”エピソードにおける詩人の独自性と *Il.X* の影響については, cf. Schlunk, *op. cit.* 59-81.

- 32) VIII 457f., *Od.* II 225, 331, 357, cf. *Il.* I 252.
- 33) e.g. *Od.* I 95, 296f.
- 34) *Od.* III 103ff., *Il.* VII 132-58, XI 670-762.
- 35) すなわち同じ嘆きでもエウアンデルの場合は *prospective* なものと考えられる。なお 568 *divellerer* の解釈は Conington, *The Works of Virgil*, vol. III, 1883<sup>3</sup>, London (= rep. 1963, Hildesheim) のものを採る。
- 36) cf. Heinze, *Virgils Epische Technik*, 1915, Leipzig & Berlin (= rep. 1972, Darmstadt) 267, *ibid.* N4.
- 37) XII 948f. トゥルヌス殺戮の際の主人公の言葉 *Pallas te hoc vulnere, Pallas/ immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit* は XI180f. *quaero/... gnato manis perferre sub imo* を受けるものとする。
- 38) Cato, *Origines*, fr. 19, *Historicorum Romanorum Reliquiae* rec. H. Peter, vol. I, 1914<sup>2</sup> (= rep. 1967, Stuttgart) 以下 fr. ナンバーは Peter による。
- 39) F. Pictor, *Graecae Historiae*, fr. 5b (= Diony. Hal. I 79) .
- 40) Ateius, fr. 1 (= Servius ad *Aen.* I 273) , Peter, vol. II.
- 41) Cato, *ibid.* et fr. 1, Peter, vol. I.
- 42) Tubero, *Historiae*, lib. I, fr. 3 (=Diony. Hal. I 80) , Peter, vol. I.
- 43) Cassius, *Annales*, lib. I, fr. 4 (= Servius ad *Georg.* 1.10) , Peter, vol. I.
- 44) Cato, *op. cit.* fr. 56 (= Solinus, 2.7) , Peter, vol. I [ ] 内は同じく fr. 56 にみられる Sextius の伝え。
- 45) e.g. Livius I 7.3f., Diony. Hal. I 31f. et 40.
- 46) ディオニシオスは、トロイア以後のアエネアス一行の遍歴とイタリアでの闘いを詳しく述べているが (I47-65), そこにはエウアンデルとの関係は見られない。なお Gransden, *op. cit.* 25f. “On to these Greek models Virgil may have grafted Roman ones, including perhaps reminiscence of Ennius’ account, now lost, of Aeneas’ embassy to the king of Alba Longa” と推定する。
- 47) Merguet, *Lexicon zu Vergilius*, 1912, Leipzig (=1960, Hildesheim) によって調べたが、同書には VIII 357 (Saturnus) の例が欠落している。
- 48) cf. Servius ad *Aen.* VIII 313 “et hic subtiliter videtur significare Romam initium ab Euandro ducere.”
- 49) ディオニシオスは類似の話を伝えるが (I64), 果してウェルギリウス以前の伝承で、ラウィニアがトゥルヌスの婚約者であり、そのため彼が怒りに駆り立てられたとされていたのかどうかは、不明。なおラウィニア=ギリシア人説,

については cf. Diony. Hal. I59.

50) cf. Perret, *Virgile*, nouvelle édition, revue et augmentée, 1965, Paris, 122.

## *Aen.*VIII and *Od.*III

### ——— Euander and the Roman poet's invention ———

Hideyo NEMOTO

A knowledge of Greek literature has rightly been regarded to be vital to the understanding of Latin authors, who are greatly influenced by the Greeks not only in respect to style and diction, but also in their treatment of literary subjects and sometimes even in their way of thinking; so is it with Vergil's *Aeneid*, which is often interpreted from the viewpoint of its debt to the *Iliad* and the *Odyssey*, especially as to those episodes, motifs and structures which are peculiar to the epic tradition. But Vergil, who had in mind, in composing the poem, a different intention to Homer, shows his originality even when he seems at first glance to have borrowed these motifs from his Greek predecessor. The present author has tried to demonstrate Vergil's "creativity" in Book VIII by examining the poet's interpretation and handling of traditional themes as well as by a comparison with *Od.* III.

*Aen.* VIII permits a ready comparison with *Od.* III, with which the main affinities are as follows;

- i) the sacrifice to a god (Hercules, Poseidon) at the moment of the hero's (Aeneas, Telemachus) arrival,
- ii) the initial address to the foreigners by a prince (Pallas, Peisistratos) of the land,
- iii) the old kings (Euander, Nestor),
- iv) their words to the guests (VIII 155f., *Od.* III 123f.) and
- v) the friendship between the kings and the guests' fathers (Anchises, Odysseus).

While the sacrifice to Poseidon seems only to refer to the genealogy of the royal family (Poseidon-Neleus-Nestor) and to prepare for Athena's invocation to the god, that to Hercules has much to do with the development of the story; first it prepares for the explanation of the Roman sites by Euander, then for the Cacus-episode where the "aristeia" of the god is related—in which one can see, through the similarities in representation, a finely woven foreshadowing of the single combat between Aeneas and Turnus in Book XII.

Aeneas, entreating Euander for an alliance, relies upon their ancient blood-relationship, an entreaty to which the old king nevertheless does not immediately respond, but suddenly alludes to the hero's close resemblance to his father, Anchises, whom the king (we now learn) had met in his youth and contracted friendship with. Thus the recognition takes place in a more dramatic form than in *Od.* III, i.e., making use of the favoured traditional motif "recognition by a host because of the resemblance between a father and a son", revealing Vergil's creativity. In order to make the episode plausible, the poet introduces into the story the Hesione legend which may have been popular at that time. It is also remarkable that arms-presents received long ago from Anchises lead to the king's promise of sending reinforcements to the Trojans as well as to the second mention of Pallas.

Aeneas and Pallas are often compared to Achilles and Patroclus in respect to the theme of revenge for a friend. In both cases arms play an important role; in the one, because Patroclus wore Achilles' armour, in the other, because of Pallas' baldric. But the baldric is not mentioned until the hero, hesitating to give Turnus a coup de grâce, sees it on the enemy's shoulder, which results in a kind of "peripeteia-effect". In the scene where Pallas is introduced, he is already depicted as a competent warrior, and later as one favoured by Venus (the Lucifer-simile); after his death the killing of Turnus becomes Aeneas' main purpose, though it originally had been to "found Rome". This double significance of the motif "Turnus' death"—revenge for a friend, and overcoming an obstacle to the founding of Rome—should also be appreciated. There are almost no clear references to Pallas before Vergil, who

seems to be the first to make the prince an important character in the story, using existing materials (e.g. the etymology of "Pallanteum"), and created him as a living personality.

A comparative analysis of the Euander and Nestor scenes brings some conspicuous differences to light; the speech of the latter, with the Orestes-story and the encouragement of Telemachus at its core, is formed in the so-called "ring-composition", which is typical of oral poetry. On the contrary, Book VIII is characterized by its speedy change of topics—the challenge by Pallas, the unexpected recognition by Euander, the Cacus-episode etc.; this method is characteristic of poetry designed to be read and contributes to produce an atmosphere threatened with war, i.e., to enhance the "Iliadic tone". Also, in their portrayal of the two kings, Homer and Vergil show wide differences; e.g., though both long for their vanished youth, Nestor does so simply as an old man with regret for his lost strength(*Il.*), but Euander as a father with overflowing paternal love who wishes he could go to the front with his son. The former's attitude toward the past may be called "retrospective", typically Greek, and the latter's "prospective", Roman.

The pre-Vergilian picture of Euander is known only vaguely to us from some historical fragments (Cato, Ateius, Pictor, Tuber etc.), in which no relation to Aeneas is traceable. Considering that the word "conditor"—hapax legomenon in Vergil—is applied to him, and that its verb "condo" is used to refer only to the foundation of Rome (except in the case of Diomedes) in the poem, the poet seems to give him a seat among the founders of the city. His alliance with Aeneas may be an elaborate invention of the poet, who permits his hero to take his place among the city founders only after he has received reinforcements from another of them, Euander. Thus the poet succeeds in weaving Euander and Pallas dexterously into the development of the story, while remaining true to traditional epic motifs at the same time.